

フィールドワークとリアリティ

—— 東アフリカ都市調査の経験から ——

松 田 素 二

はじめに

今日、社会調査にまつわる議論がかまびすしい。いくつもの社会学関係の学会の学術大会において、社会調査についてのシンポジウムが開催されたり、学会誌に社会調査についての特集が掲載されている⁽¹⁾。こうした状況は、科学や学問の社会貢献といった「時代の（政治的）要請」といった側面があることは疑いない。とりわけこれまで、こうした働きかけから距離をとってきた社会学や人類学は、その荒波に直接対峙することになった。この（政治的）要請の次元とは別に、科学論、方法論の再検討という文脈においても、社会調査はその土台から根源的な再考が求められるようになった。それは近代科学を支えてきた実証主義的パラダイムや、調査と他者表象という営みに含まれる広義のポリティクスへの懐疑という、いわゆるポストモダンの思潮とも連動するものであった⁽²⁾。このような社会学と社会調査を取り囲む時代状況が、今日、シカゴ学派の再評価と再検討という動きを生み出した背景にある。

日本において、シカゴ学派社会学と現代的意義に早くから注目し、シカゴ学派ルネッサンスの流れを牽引してきたのは、宝月誠と中野正大らを中心とする研究グループであった。シカゴ学派社会学の特色については、すでにいくつもの優れた研究が宝月、中野らの研究によって明らかにされている⁽³⁾。たしかにシカゴ学派については、強力なイメージが流布し浸透しているといつてよい。たとえば、中野はグルドナーの紹介を引用しながら、「あ

⁽¹⁾ たとえば日本社会学会74回大会（2001年）では「社会調査の困難」というタイトルのシンポジウムが開催され、同じ年の関西社会学会52回大会でも「社会調査の多様性と可能性」というシンポジウムが開催された。

⁽²⁾ 社会調査、とりわけフィールドワーク批判については、松田、1997、1998、2003を参照のこと。

⁽³⁾ 宝月、中野は科学研究費のプロジェクトとしてシカゴ学派の再検討をテーマとした組織的研究を重ね、内容豊かな報告書を公刊している。その全体像については、宝月、中野、1997、および中野、宝月、2003が参考になる。

りふれたものより風変わりなもの、退屈な分類学よりもいきいきとしたエスノグラフィ的な細部描写、無味乾燥な分析よりも感覚的な表現、型どおりの質問紙調査よりも自然主義的観察を好む」と、その典型的な調査スタイルを指摘している⁽⁴⁾。たしかにヒッピーや麻薬中毒者、タクシードライバーや売春婦、ベテナ師やいかさま師といった近代的な大都市社会の下層にうごめく人々の生活世界を細部から具体的に描き出した膨大な作品群を、シカゴ学派は創り出してきた⁽⁵⁾。

シカゴ学派社会学のもつこうした特色は、社会を構造化し合理的に把握しようとしてきた近代科学主義とは一線を画するものとして近代批判の潮流から見直されることとなった。さらに社会の具体的矛盾への実践的アプローチは、制度の改良・改善を志向する政策科学として、今日のグローバル化時代における科学論のモデルともなった。このように、シカゴ学派社会学の現代的意義を定位することはできるのだが、宝月、中野らの再評価の視線は、より根源的な射程を包含している。彼らは、シカゴ学派についての定型的な理解を超えたところに、その可能性を再発見しているのである。たとえば、モノグラフ、事例研究志向と見なされてきたシカゴ学派が、じつは計量的方法を体系的に導入し、むしろそちらの方が優勢になっていく過程を精密に解明した点も、そうした貢献の一つだろう。彼らは、シカゴ学派のもつ方法論の総合性を強調したのである。

だが宝月、中野らの成果のなかでより重要なのは、「体系的な理論がない」と見なされてきたシカゴ学派が固有に発展させてきた理論的基盤を、思想史的条件のなかに位置づけ、そこに現代的意義（とりわけポストモダンの実証主義批判の超克）を見いだした点だろう。宝月は、シカゴ学派の方法論的基盤を、ミードの象徴的相互作用論、デューイやジェームズのプラグマティズム哲学、ホワイトヘッドの有機体哲学との絡み合いのなかに発見し、事象のリアリティを懐疑する今日の社会理論に対する、強力なオルタナティブとして再評価しようと試みる⁽⁶⁾。なかでも「アメリカの実用性の哲学」と軽蔑されてきたプラグマティズムをミードの解釈の延長上で再解釈して、シカゴ学派再定位の根幹に据えようと試みた点はきわめて説得力の高いものだった。ミードにとって、プラグマティズムは「思考を行為に準拠させるもの」に他ならなかった。観念論哲学の壮大な体系を作り上げる知性や思考は、ミードから言わせれば「それらのもっとも精密な社会的表現においてさえも、

⁽⁴⁾ 中野、宝月、2003：147

⁽⁵⁾ 大都市シカゴの周縁部に暮らすさまざまな下層の住人のモノグラフについては、宝月、中野、1997および宝月、吉原、2004に紹介と分析がある。さらに詳しい紹介と解説は、京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』において、中野の指導のもとで蓄積されている。

⁽⁶⁾ 初期のシカゴ学派に与えたデューイやジェームズの影響については、宝月、加藤が編集・翻訳したミード、2004の第12章が参考になる。

人間の行為や行動にそれほど内在的ではない」のである⁽⁷⁾。思考は行為のほんの一部でしかないものであり、したがって行為の基準は、思考によって導き出されるはずもなく、ただ行為の結果のなかにしか見いだされないというプラグマティズムへの信頼は、シカゴ学派の社会調査の根底に共有されている。

宝月は、こうしたプラグマティズム的姿勢のなかに、近代科学主義と俗流ポストモダニズムの双方を乗り越える可能性を指摘する。まずこの態度は、「世界や歴史に関する目的論的な理解様式と、そこに前提されている理性を拒絶する」ものであることを述べ、理性と論理を至上のものとする近代主義的（啓蒙的）姿勢を根本から解体する⁽⁸⁾。かえす刀で、人々の経験が、共同体における生活のなかで形づくられ、生きられているというリアリティに注目することで、リアリティを懐疑し、結果として、行為行動を思考へと還元して処理してしまう俗流ポストモダニズムを斥けるのである。こうして土着化（共同体化）した理性を組み立て直し、人々が生きている現場における探索者としての地位を再創造していくというのが、宝月のシカゴ学派再検討の基本的な問題意識なのであった。

したがって、この宝月的社会調査の方法論にしたがうなら、単一で至上の理性による社会把握という発想は生まれてこないし、統一的で標準化された社会調査法という存在そのものがありえないことになる。代わって登場するのは、人々が暮らしを営む現場現場におけるリアリティの創成の過程である。この過程は、調査する者とされる者との相互作用によって揺れ動きながらも、総体としてその場の生の経験を再構成することを可能にしている。

以上のような問題意識に立って、本論においては、東アフリカの都市社会という生活の現場において、どのように調査過程が編成され、リアリティの創成がなされたかについて、私の経験を再検討してみようと思う。それを通して、近代主義的実証主義の視点とそれを拒否するポストモダンの視点とを乗り越える調査論の地平をかいまみるのが、本論の意図である。フィールドに調査者として入り、どのようなリアリティを感じ実践していったのかという個人的経験について、最初から順に振り返るこの論考は、いわば私的経験を題材にしたフィールドワーク論の実験でもある。

⁽⁷⁾ ミード、前掲書、p253

⁽⁸⁾ 中野、宝月、2004における宝月論文「G.H. ミードにおける科学と実践」pp96-97

1. 都市に目を向ける

同時代都市ナイロビ

アフリカ大陸は、人類学のフィールドの宝庫といわれてきた。ブッシュマン、ピグミーといった狩猟採集民、マサイやフルベのような牧畜民、それにシコクビエやヤムイモを栽培する農耕民たちが、いりまじって多様な社会生活を見せてくれる。今世紀になってから、実に多く的人类学者が、ヨーロッパからアフリカにやってきた。彼らはこぞって未開を求めて奥地へ奥地へと入っていった。彼らの描くアフリカ像の多くは、エキゾティシズムにあふれた異界のイメージを基調としていた。

今から四半世紀も前のことだ。アフリカで2年間のフィールドワークをおこなう機会を得た私は、アフリカ大陸の奥地に行くのはやめよう、異界のイメージの上にアフリカ社会を描くのはよそう、と思った。同じ世界の同じ時代に生きるアフリカの人々が目に入る場所をフィールドにしようと考えたのである。そういうわけで日本から最も手軽に行けるケニアの首都ナイロビを選んだ。ナイロビは、当時人口約百万人の東アフリカ第一の都会だった。シティセンターには、近代的なビルの立ち並ぶオフィス街と白人観光客のための高級ホテルやショッピングセンターがあり、そこだけ見るとまるでヨーロッパの町のようなのだ。しかし、周辺部にはアフリカ人の下層労働者居住地区が大きく拡がり、そのあいだにはさまれて、豪邸がならぶ高級住宅地と、近年開発が進む新興の中産階層居住地がある。私は、文句なくアフリカ人中・下層居住地区をフィールドに選んだ。ナイロビ住人の圧倒的多数が、この地区に住んでいたからだ。彼ら「普通のナイロビ生活者」の目を通して、世界と時代を見直してみたいと思ったのである。それは、これまでヨーロッパという一つの強大な権力から提示されてきた社会観や歴史観を、アフリカ人の都市生活者の日常からとらえかえす試みといえるかもしれない。

出稼ぎ民とともに住む

そうはいっても、いったい何から始めればよいのだろうか。私は、とりあえず行きつけの酒場のボーイをしている青年に頼んで、彼の住んでいるところを訪問させてもらうことにした。ホテル、食堂のボーイや小売店の売り子、行商、メッセンジャーそれに邸宅のサーバントといった職種は、何の資格も学歴もない村からの出稼ぎ者が普通に手に入れることができる職業だからである。その青年の名前は、オブド、24才。ナイロビから西へ400キロ

メートルほど離れたカカメガ県から5年前にナイロビにでてきたマラゴリ人だ⁽⁹⁾。彼の住んでいた地区は、シティセンターから西へ幹線沿いに10キロほどいったところにある、大きなアフリカ人居住地区でカンゲミという。1979年のセンサスでは、カンゲミの人口はすでに2万人を超えていた。独立直前の1962年の人口が4千人であったことを考えると、わずか10数年の間に人口が5倍にも膨張したことがわかる。その膨張を支えたのが、オブド青年のように、村からナイロビに出てきた大量の出稼ぎ民の存在である。私は、オブドが住んでいる長屋の一室を借りてカンゲミ地区に住むことにした。

2. 日常のつきあいを始める

近所とつきあう

カンゲミには、出稼ぎ民むけの木造で安普請の長屋が軒をならべている。独立前のカンゲミでは、キクユ人の農民がトウモロコシやバナナそれに野菜を作っていた。しかしのどかな農村風景は、ナイロビへの出稼ぎ民の数が激増する1960年代後半になって一変した。農民たちは、競って畑をつぶして出稼ぎ民用の長屋を建て始め大家となったのである。私が借りた部屋もそうした長屋の一つにあった。電気や水道はもちろん無い。一つの長屋は10から20の部屋に仕切られる。床はデコボコのコンクリート、屋根はトタン、壁は薄い板である。部屋は四畳半ほどの広さで家賃は当時月に100シリングだった（当時の1シリングは約30円）。この時代、日雇いで建設現場で働くと一日20シリング、ビール一本は5シリングだった。この部屋で私のナイロビ暮らしが始まった。

翌日から近所を見渡すと、20代、30代の男が2、3人で一緒に住んでいるケースが多いのが目についた。彼らは、村に家族を残して単身でナイロビにやって来て、兄弟、イトコと住んでいるらしい。夫婦と子供という世帯もけっこうあるのだが、そのなかには単身赴任男のナイロビ妻と彼女の連れ子というケースも多いことを後で知った。

オブドが「ナイロビは危険な町だがカンゲミのこのあたりは安心だ」と何度も言うので不審に思っていたが、そのわけはすぐにわかった。私の長屋のまわりは圧倒的に、オブドと同じマラゴリ人が多いのである。マラゴリ人以外でも、彼らと言語・文化が近縁なイスハ人、イダホ人、ティリキ人、ブニョレ人といった西ケニアからの出稼ぎ民がかたまって住んでいる。そこでオブドが「いい長屋」といった地区にある60の長屋の745の部屋を調

⁽⁹⁾ オブドの一族の100年間の生活史については、松田2004で詳述した。

べてみると、実に34.4%がマラゴリ人であり、同じ西ケニアからの出稼ぎ民を加えると66.1%にも達することがわかった。

ナイロビのアフリカ人居住地区は、それぞれ特定の民族集団が固まって住む傾向が強い。カンゲミは、マラゴリを始めとする西からのルヒャ系諸民族が集住している。さらにカンゲミのなかでも各民族同士が棲み分けている。だから私の最初の仕事は、近所の民族間関係を把握することに向けられた。彼らは、相手と状況に応じてマラゴリ語、ルヒャ語、キクユ語それに東アフリカの地域共通語であるスワヒリ語を自在に使いわける。近所同士では、頻繁に物の貸し借りが行われる。石鹸、トウモロコシ粉、食器などがその対象となる。それよりも頻繁なのは、食事時の押し掛け訪問である。ナイロビにきてまだ職が見つからないものや村からの新参者は、当然のように仕事のある者のところで食事をする。私の部屋にも常に4、5人の見知らぬマラゴリ人が食事時になるとやってきた。これは、私がよそへ押し掛けることをおぼえるまで続いた。

酒を飲みかわす

カンゲミに移り住んでしばらくの間は、たった一人のムズング（スワヒリ語で白人の意味、日本人もそう呼ばれる）ということもあって、朝起きてから、食事、トイレ、洗濯、買物と、近所の子供たちの監視と尾行に辟易させられた。物珍しがられていることにも徐々に慣れはじめたころ、今度は、大人たちの夜襲がはじまった。酒の誘いである。ウィークディだと仕事（探し）から帰った6時すぎから夜道が物騒になりはじめる9時ごろまで、週末は、昼飯後から夕方までの第一ラウンドと夕飯後から9時、時には明け方までの第二ラウンドが酒の時間である。特に給料が出た直後の月末、月初めの一週間は、どの酒場もたいへんに混みあう。カンゲミ生活も1ヶ月も過ぎたころから、私にもちよくちよく誘いがかかるようになった。

彼らはさまざまな酒を飲む。もっともポピュラーなものはビンビールだ。壊れたジュークボックスと防犯用の鉄格子に囲まれたカウンターそれに乱雑に並べられたテーブルと椅子。これが、一般的なアフリカンバーで、ビールもここで飲む。5人で行くと、まず5本運ばれる。一人が飲み干してもう一本欲しいときは、また5本注文する。それが終わったらまたもう5本・・・という具合に空ビンがまたたくまに3、40本ならぶ様は、壮観である。私にとっては、マイペースで飲めないこのやり方は、苦痛以外の何ものでもなかった。

ビールもいいが、この時代からはじまったケニアにおける物価上昇と物不足という厳し

い環境の中で、もう一つの酒に人気が集中していた。それは、トウモロコシのドブロク酒と焼酎である。前者は、ブサーと呼ばれビールの五分の一の値段で同じ量が飲める。後者（チャンガー）は、密造酒で厳しく取り締られているが「素早く殺して」という隠語で広く造られ売られている。ビールや地酒を苦しんで飲みながら、一つ気になったことがあった。それは、彼らの飲酒ネットワークがやけに閉じられたものだということだ。オブドは西ケニア南マラゴリ郡のKという山村出身だが、彼の飲酒に一月つきあってみると、彼は同じK村出身者以外と飲むことは稀であった。このことは、いく人もの飲酒行動を観察することによっても確認できた。同じマラゴリ人、同じ長屋に住んでいる、同じ職場で働いている、というだけでは彼らは、共に酒を飲まないらしい。幼い頃から生活をともにした同村出身者のみが寄せ集って飲む、これが都市出稼ぎ民の飲酒スタイルなのだ。私は、ナイロビという大都会の中で、村と同じ社会関係を守って生きるしかないアフリカの都市生活の一面を見た気がした。

仕事を捜す

オブドの友人たちと酒を飲んだり、テンベア（目的も無くぶらぶらすること）したりして暮していると、もっとも退屈なのが午前中の時間である。仕事を持っているものは、朝早くに出かけるし、仕事の無い連中も朝は、姿を見せないからである。オブドの村からナイロビに出稼ぎに来ているものは、約70名余り、その内約三分の一がカンゲミに住んでいる。そのなかで定職に就いているのは半分足らずで、残りは仕事を捜している。長いものになるともう20年近く捜し続けているものもある。ケニアにおける雇用問題は、他のアフリカ諸国と同じく危機的な状況にある。近年ではエリートであるはずの大学卒業生ですら、職を得るのは容易ではない。ましてや中学校中退とか小学校卒業の出稼ぎ民にとって、フォーマルな雇用への門は完全に閉ざされている。

さらに雇用構造を見ても先行きは明るくない。ケニア政府によると、ナイロビには約36万の雇用が用意されているが（1989年）、その内訳は、13万件が下級公務員や個人の屋敷のサーバントといった植民地時代から変わらない職業であり、製造業に従事するものは6万人強に過ぎない。レストランやホテルの従業員、それに店の売り子といった職種も5万件弱ある。つまり昇進や昇級の展望のない仕事しか、普通の出稼ぎ民には開かれていないのである。統計にのるこうした職を手に入れることは、オブドの友人にとっては、至難の技だ。それでも彼らはチャレンジする。その方法は、ボーイ、売り子、サーバントをしている同じ村からの出稼ぎ民を訪問して、空いたポストの情報をもらったり、口をきいても

らったりすることだ。こうして何とか定職を手に入れた村人に、「誰から援助してもらって職を得ましたか」と聞いてみると、大半は、父、兄弟、母の兄弟、妻の兄弟といった「身内」からの援助であった。ここで私は、ナイロビという都市社会で頼れるのは、同じ民族というだけではなく、同じ村人というだけでもでもない、結局のところ「身内」しかないのだという厳しい現実を知った。

こうした職探しに失敗すると、彼らは、統計にのらない職を捜すようになる。今日では、これが職探しの一般的な姿になっている。統計にのらない職業というと、犯罪者とか売春婦を思いうかべるかもしれないが、そうではない。日雇いの建設労働者と行商が彼らにとっての統計にのらない職業なのである。ある日、そうした職探しにつきあってみた。まず朝5時には家を出る。そして歩いて10キロメートルほどのところにあるマンションの建築現場に到着した。それからすでに集っている顔なじみのマラゴリ人に挨拶する。8時前にキクユ人の現場監督がやってきた。おはよう、とだけ言ってひたすら待つ。9時半ごろいきなり現場監督がこちらを一瞥して、「あのブロックを早くあそこに運べ」と怒鳴った。隣で待っていたキクユ人の青年が飛び出して行って手伝う。これで彼は、今日の仕事を果たした。私たちはあきらめて帰った。翌日は違う現場に、次の日はまた違う現場にとくたくたになりながらひたすら歩き、そして待つ。ようやく2週間後、彼は、基礎工事の穴掘の仕事をみつけた。ただし期間は、1週間、その内1日分の給料を現場監督に差し出すという条件付きの幸運だった。

3. コミュニティに関わる

教会に行く

カンゲミ生活にも慣れ、言葉もやっと通じはじめたころ、教会に誘われた。それはクウェーカー教徒の集る、フレンズ派の教会だった。教会といっても立派な建物があるわけではない。カンゲミ地区にある唯一の市営集会場を2時間借りておこなう。2時間が過ぎると次の教会が使用するので、要領よくやらねばならない。朝、7時に行ってみるともう50名ばかりの信徒が入っていた。多くは、老人と女性であり青壮年の男は数人だけだった。式はスワヒリ語で行われたが、要所要所でマラゴリ語のジョークが挿入され笑いをとった。後で聞くと参会者の8割がマラゴリ人で、残りも言葉が近いルヒャ系の人々であった。

説教をしたのは、本職の牧師ではなくナイロビ大学の実験室で雑用をしているマラゴリ人で、私の友人だ。司会も白人屋敷のボーイをしているマラゴリ人である。マラゴリとキ

リスト教とりわけフレンズ派とのつながりは古く、今世紀初頭まで遡る。1880年代にイギリス人の行政官がはじめて西ケニアを支配下におこうとしたとき、マラゴリはじめ多くの民族が服従を拒否した。彼らは、独自の統治制度と神、祖霊、邪悪な死霊などでかたちづけられた世界観をもっていた。イギリスは圧倒的な火力と組織力を駆使して、1890年代にはほとんどの抵抗を武力で鎮圧した。キリスト教の宣教師が大挙して押し寄せてきたのはその直後からであった。1902年には西ケニアのカイモシにフレンズ派の伝道所ができたのを皮切りに、1903年ローマカトリック、1906年イギリス国教会などが続々と西ケニアに布教拠点を建設した。同じ1906年には、オブドたちの村のすぐ近くのビヒガの町にフレンズ派の教会が建てられ、多くのマラゴリ人がキリスト教に改宗した。その教会は、1917年には700名近い信者を抱える大勢力となった。こうしてフレンズ派は、「マラゴリ人のキリスト教」になったのである。

私がはじめて調査に入った1980年頃のカングミでも、マラゴリ人の間でフレンズ派が確固とした支持基盤をもっていることはそうなのだが、気になることがあった。青壮年の男たちの姿がみえないことだ。彼らはどこにいるのだろうか。その疑問は意外に早く解けた。彼らが中心になって活動している教会があるのだ。それは、アフリカ聖霊教会という新興キリスト教会だった。ある日曜日その屋外集会に参加した。参加者はほぼ全員マラゴリ人で説教もマラゴリ語で行われる。司祭は、よく地酒酒場で一緒になる白人屋敷の夜警の男だ。強烈なドラムと力強い賛美歌の中で集会は始まる。まず祈りと救いを求める男たちが立ち上がって、それぞれの抱える困難を告白する。就職難あり、結婚難あり、病気あり、それを皆で足を踏みならしながら祈るのである。女性信者のなかには、聖霊に憑依されて失神するものも出てくる。

こうしたアフリカ人自身が創設したキリスト教は、独立教会と呼ばれ昔からあるのだが、ケニアの独立後、都市部の失業者、下層労働者層を中心に著しく勢力を拡大している。のんきで気のいいと見えたマラゴリ人出稼ぎ民の抱える悩みと矛盾、そして既成の秩序に対する憤怒がストレートに出てくるこの独立教会に、私はたいへんな衝撃を受けたのを覚えている。

葬式に出る

教会に通ったり酒を飲み交わしたりするうちに、私は、オブド青年の故郷南マラゴリ郡ビグル地方出身者のネットワークに組み入れられるようになった。彼らは、カングミだけではなくナイロビのあらゆるアフリカ人居住地区に散らばっていたが、その情報伝達の早

さには驚かされた。カンゲミは彼らのネットワークのヘッドクォーターであり、マーケットのそばの巨大な陸橋が彼らのミーティングスポットだった。日曜日そこでたむろしていると、あらゆる種類のふるさと情報や個人情報が入る。それらの情報の中でもっとも重要なのが葬式に関することであった。

ある夜、ネットワークの一員である若者が私の部屋に来て、村からの出稼ぎ者が交通事故で死亡した、と伝えた。彼は、カンゲミのなかの主だった村人に連絡をとるために派遣されて来たのである。死者は、同じナイロビの下層居住地区キベラに住む40代の石工職人で、現場に彼らを連れていくトラックが横転したためその下敷になって亡くなっただけで、遺体はまだ市営安置所にあるという。その後、遺体をふるさとに移送するために、仲間の出稼ぎ民の奮闘が始まった。彼らは、都市で死亡した場合でも母村の屋敷地に遺体を埋葬するという習慣を維持しているのである。

もともとマラゴリ人の観念のなかには、都市における死というものはなかった。彼らが死ぬのは、自分の家であったり、畑であったり、戦場であったりしたのだ。しかし今世紀に入って、ケニアを植民地化したイギリスは、コーヒーや紅茶のプランテーション用の安価な労働力として、道路・鉄道建設の人夫として、あるいはポーターやサーバントとしてアフリカ人を村から連れだした。その過程で、「出稼ぎ先での死」が生まれた。そして今日、実に多くの出稼ぎ民の死がナイロビにはある。この新しくつくられた死に対処するために、マラゴリ人出稼ぎ民は、独特の儀礼や制度を創りだしている。

私は、オブド青年たちと連れ立って、キベラ地区にある死者の長屋を訪問した。死後一週間になろうというのに遺体はまだ安置所にあった。移送のための資金が不足しているのである。ミニバスを一台チャーターして、ナイロビから村に帰ると、オブドの給料の約一年分近くがとぶ。棺桶だけでも2ヶ月分である。それに遺体が腐敗しないように防腐剤の注射液やドライアイスを買うとまた余計に費用がかかる。私たちは、遺族にお悔みをいって100シリングをカンパして、名前、村、金額を備え付けのノートに記帳して帰った。このケースでは、結局、死後10日で費用が集り、遺体は無事母村に送られた。それから半年後、私たちは再びキベラ地区の死者の部屋に集った。死者の都市祈念儀礼が行われた。これは、マラゴリ人出稼ぎ民が新たに発明した儀礼で、この儀礼の日まで死者の部屋は借り続けられる。儀礼は簡素で、祈りと歌が断続的に続くなかで人々が共食し遺族のために寄付金を差し出す。この儀礼によって、死者の痕跡（マラゴリ語ではシニィニイー影と呼ぶ）はナイロビから完全になくなると言われている。

講に加わる

カンゲミ滞在も一年近くなったある日、村の長老で出稼ぎ暮らし30年のY老がやってきて、彼らの互助講に加入するよう勧められた。「お前ももうたぐさんの葬式に出て多くの人を助けてきたから講に入る資格がある」というのが彼の意見だった。わたしは喜んで、入会金とその月の会費を支払った。出稼ぎ民たちは実に多くの互助講をつくる。健康保険も生命保険も社会保険も何にもない彼らにとって、頼りになるのは自分たちで作ったこうした互助講しかないのだろう。さらに彼らの背後には貧しい母村とそこに住む家族がある。村の幼稚園、小学校、教会といった彼らの共有財産の維持運営のための費用も彼らの負担になる。こうした個人の能力を超えた状況に積極的に対処するためにも、互助講は必要なのである。講にも流行りすたりがある。独立前後に生じた主要民族集団間の政治的権力ぶんどり合戦のときは、民族ごとの「部族結社」がパワーエリート中心に組織された。その後1960年代に入ると、各民族の出稼ぎ民は、父系氏族（クラン）ごとにクラン結社をつくっていった。つづいて70年代には同じ村出身者がまとまる村講が、クラン講にとって代り、80年代は村講がいくつか合併して、大規模な地域互助講がナイロビに出現した。

私は、結局クラン講、村講、地域講にそれぞれ加入させてもらった。クラン講の主だった仕事は、死者の棺桶代の調達だった。村講は、密造酒の不法所持・販売や身分証明書不携帯で警察に捕まったメンバーの保釈金の援助や小額のローン活動などもおこなっていた。しかしながら、互助講の最大の役割は、遺体の母村への移送費用の調達である。このとき私が加入した地域講は、ナイロビ在住の南マラゴリ郡出身者1300名が組織した大がかりな葬式講であった。その組織は、みごとにまでにシステム化されていた。

まずそれぞれの母村ごとに支部が作られ支部長、書記、会計が選ばれる。それとは別に連絡網が、ナイロビを14の居住地区に分けて設定されており、死亡のニュースや事務連絡は、遺族→村支部長→カンゲミ本部→14地区の連絡責任者→各地区の各村世話人→各村出身メンバーという順序で、整然かつ迅速に行われる。すべての互助活動は、本部書記長が保管している葬式帳に細かく記載されている。私が、一年の間におこなったカンパもちゃんと記録されていて、それが「よいメンバー」として迎えられる理由となった。私は、それから月に一度の支部総会には欠かさず出席して、ますます彼らの母村であるK村のネットワークに深く関わりはじめた。

4. 日常のリアリティから現代世界を視る

村を訪ねる

ある日、オブドが私の部屋にやってきて「クリスマスが近くなったから来週村に帰るけど、よかったら一緒に行かないかという」。聞けば、同じ時期にカンゲミの悪友たちの半数がK村に戻って、クリスマスを過ごすらしい。彼らの都市生活の大部分を占めている村的人間関係を育んできた原点を、ぜひこの目で見たいと思っていたので即座に承諾した。行くことを決めると色々やらねばならないことができる。まず部屋に鍵をかけたまま出かけると、必ず空巢に入られるから、代りに住んでくれる人を確保しなければならない。オブドは、ベッドやイス、マットレスまで持ってかえるからバス停留所まで運んでくれる友人を頼むのに忙しそうだ。それに、村で私をむかえてくれるオブドの一族のためのプレゼントも、悩みの種だった。

どうにか満員の西ケニア行きの長距離バスに、もぐりこむことができた。深夜にナイロビを出たバスは、翌朝早くに南マラゴリの玄関口マジェンゴに着いた。もうマラゴリ語以外は聞こえない。オブドの表情がなごんでくるのがよくわかった。やはりナイロビ生活はそうとう彼らに緊張を強いているようだ。マジェンゴから乗りあいバスに乗り、歩いて山道を3キロほど登ってようやくK村に到着した。カンゲミと比べると、何と平和で純朴なところだろう、というのが第一印象であった。オブドのお母さんの小屋の一角を借りて、寝袋生活の準備をした。翌日から村を歩くが、ナイロビで会ったことのある人が実に多い。青壮年の9割近くが出稼ぎのために村を出ている。その大半がナイロビにおり、彼らのヘッドクォーターのカンゲミに私は住んでいるのだから、既に知っている人も多いというわけだ。人々は、花崗岩の巨石の間を巧みに耕した畑に、トムロコシやラッカセイを栽培している。「困ったら村に帰るさ。村では食えるからね。」と町の失業者はよく口にする。たしかにトムロコシが豊かに実った畑を見ると、そう思える。しかしながら、資本主義原理の都市と自給自足の伝統的農村。この二重構造こそが、彼らの生活を苦しめているのかもしれない。ケニアの国民経済は、資本主義の世界システムのなかでは脆弱な周縁部分に位置している。世界市場の好不況によって、大きな影響を受ける。都市の工場やプランテーションの雇用主は、不況で人員整理をしたいときは、自由に出稼ぎ民を解雇できる。彼らは村に戻って自給自足するのである。逆に好況時には、村から労働力を引き戻して、不安定な季節労働者として安い賃金で使用できる。都市の大企業にとって、自給する村は、資本にとっての余剰人員を自己負担なく維持したり、無料で労働力をリフレッシュしてく

れる、なくてはならない存在なのだ。一見のどこに見える村の風景も、こうしたケニアの周縁資本主義の性格がつくりだした近代的装置なのかもしれない。そう思うと、のどかなはずのK村の風景がちょっと違って見えてくる。

虚構と向き合う

村からナイロビに戻ってから、私はますますK村出身出稼ぎ民のコミュニティから受け容れられたような気がした。私は、彼らが村に残している家族のプロフィールや村内の複雑な親族関係をほぼ頭に入れていたので、その知識を披露することで、彼らが驚き喜ぶのがうれしかった。彼らを訪問したり、彼らが持参した密造酒をともに飲みあかしたりする毎日は、正直楽しかった。調査対象者の言語を操り、信頼関係を取り結び、一員として認知される。私のフィールドワークもどうやら成功といえるだろう、などと思ったものだった。

この幸せな思い上がりが打ち砕かれたのは、出稼ぎ民の生きがい聞きだそうとしたときのことだ。生きがい調査などというものを思いついたのは、定職もなく、あっても昇進や昇級の道を閉ざされた出稼ぎ民が、どうしてあんなに前向きに明るく生きていけるのだろう、と素朴に感じたからであった。しかし彼らと一対一で何度も話し合っているうちに、当然のことながら、私は自分の身勝手な思い上がりを恥じるようになった。ある出稼ぎ民は、彼を取り巻く社会環境への激しい怒りと不信を述べた。「肌の白い人間や肌は黒くても英語を流暢に話す人間が、ワシらをいいようにあしらっているのさ。しょせんここは白い国（キズンゲーニ）なんだ。お前さんもその一人さ」。彼らと私のあいだにある立場の非対照性を、ズバッと突きつけられた。たしかに、白い肌の人間が黒い肌の人間を調査することはあっても、その逆はけっしてありえないのが現実なのだ。

別の出稼ぎ民は、日頃親密につきあい世話にもなっている一族のメンバーや村の友人への不信をあらわにした。彼は、自分の子供たちのこれからの行く末を案じていた。学費が出せず分けてやる土地も無く、どうやって暮していくのだろうと嘆くのがあった。彼は、その原因を一族のあるものの邪術に求めていた。教会でともに祈り、互助講でともに助けあっている親族とのあいだに、呪い呪われる関係が続いていたとは。そして私以外の全員がそのことを知っていたとは。私はよそのものであることを思い知らされた。彼らは現代社会の矛盾を把握し、私との間の不自然な関係を批判し、教育・家族の問題に頭を悩ましている、というあたりまえのことがわからず、善意の調査者を演じていた私自身こそが、彼らにとって、滑稽なビエロだったのである。

近代史を読み直す

K村にはあれから何度も行った。ナイロビに出稼ぎにいつている村人も、頻繁に村に帰る。その最大の原因は、村でおこなわれる葬儀への参加である。一族の葬儀に参列しないと、死者の悪霊に祟られるという信念が、彼らを走らすらしい。都市の死、村の死、都市の儀礼、村の儀礼と出稼ぎ民は走る。それを援助する互助講もフルに活動する。こうした光景をながめていると、都市で生活する彼らは、伝統を守り伝統に生きているかのようだ。近代化が進めばすすむほど貧しい出稼ぎ民は再伝統化する、という命題を唱える人もいる。たしかに部族、クラン、村といった伝統的な社会関係が華々しく登場しているさまを見れば、そう考えるのも無理はない。しかし、こうした社会関係は、本当に昔からのものなのだろうか。そう疑ってみると、もう一つの近代史が見えてくる。

今世紀初頭、まだ幼いオブドの祖父がその母親に連れられて現在のK村に到達したころ、彼らは、「マラゴリ族」ではなかった。村もまだ成立しておらず、いくつかの集落が点在するだけだった。もちろんKという現在の村の名前も存在しなかった。新天地を求めて南から移住してきた祖父の一族は、その地で生活するのに都合が良いので「マラゴリ人」を名乗り、マラゴリ風のクランを創設した。その時代、イギリス植民地権力は、西ケニアを支配下におこうと様々な策動をこらしていた。彼らの戦略の中心は、効率の徴税と労働力徴用のために、被支配民を登録することだった。アフリカ人を固定的な帰属単位にはりつけて、移動性を押さえることによって、管理統制を容易におこなおうというわけだ。アフリカ人の帰属単位として、イギリス人が選んだのが、一つには部族であり、もう一つが村(village)→郷(sub-location)→郡(location)→地区(devision)→県(district)→州(province)という行政区分だった。こうした植民地支配の戦略によって、「伝統的」と今日いわれているものが創られたという側面があるのだ。

もちろんマラゴリ人も、この支配の戦略に翻弄されるばかりではない。彼らが生活しやすいよう、状況ごとに民族的アイデンティティーをスイッチしたり、行政区分とは別個に新しい地縁観念を創造したりして、巧妙に生を営んでいる。先に述べた都市の儀礼の発明なども、そうした彼らの生活戦略の発露であるといえる。「伝統的」とは、決して、変わることなく守られてきた古くさい因習のことではなかった。それは、アフリカ近代史のなかで、支配しようとする白人権力と、それに抗して生活しようとするアフリカ人の意志とが、対立、競合、妥協しながら織りなすダイナミックなプロセスなのであった。カンゲミで普通の出稼ぎ民と生活をともにしながら、植民地化、都市化、近代化を推し進める巨大な力と、その力に創意工夫をこらしながら対抗してきた彼らの創造力を見た。日常生活の

ミクロな行動や思考を通して、20世紀近代という歴史や現代世界のマクロな構造をかいまみることができた。それこそが同時代のフィールドワークの魅力であり、醍醐味でもある。

おわりに

ナイロビのマラゴリ人出稼ぎ民社会のフィールドワークをはじめたとき、調査するものとされるものの非対称性を実感し、他者を表象する暴力と一方的に記述するポリティクスの前にたちすくんだことは事実であった。しかし、そうした逡巡は、たとえどのような論理と言説で粉飾されようとも、両者の関係性の実態を変革することはない。言い換えれば、フィールドワーク批判による思考停止は、あくまでも思考の停止であって、両者の関係性を構築し再生産している現実の経験とは無縁のものであった。相互の経験の接触は、生活次元のリアルな折衝・交渉を生起させることによって、相互の生活世界に他者を侵入させる。こうして同時代の生活者の次元における通交が可能になる。それは調査するものとされるものの異質性をそのままにした、通交の可能性であり、それこそが思考の停止を乗り越えて生きられた経験を別個に共有するフィールドワークの地平を切り開いていく原動力となるのである。

宝月が示したシカゴ学派の方法論におけるプラグマティズムの創造性は、今日のフィールドワーク論のコンテクストのなかでなお有効性を失っていない。リアリズムと本質・実態性を解体して社会の現実を言説と修辞の世界へと矮小化する際限のないシニシズムと、それに反発して本質的存在の先験的な承認へと回帰する自省なき実証主義とのあいだで、フィールドワーク的方法が、今日、認識論的にも存在論的にも転換期に直面していることは間違いない。この状況のなかで、自己解体・自己否定の袋小路（俗流ポストモダンの調査批判）と居直りの先祖帰り（近代主義的実証主義回帰）の双方を同時に乗り越えるために、宝月がシカゴ学派の現代的意義として再生させたプラグマティズムの創造性は大きな可能性を有している。それは、実践の思考に対する優位を確定したうえで、相互のリアリズム構築を行うという共同行為としてのフィールドワークというスタイルをとることになる。フィールドワークのみならず社会調査の危機が議論されている今日、新たなリアリズムに依拠したプラグマティックなフィールドワークは、21世紀の社会調査の一つのあり方を示すものになるだろう。宝月が主導したシカゴ学派ルネッサンスは、フィールドワークの実践的再生と理論的再構築にとってもきわめて重要な役割を果たしているのである。本稿はこうした営みとフィールドでの個人的経験をつなぐための試みとして位置づけられる。

【参考文献】

- クリフォード,J., (太田好信他訳), 2003, 『文化の窮状』人文書院
- 中林伸浩, 1991, 『国家を生きる社会—西ケニア・イスハの氏族』世織書房
- 中野正大、宝月誠（共編）, 2003, 『シカゴ学派の社会学』世界思想社
- 日野舜也, 1984, 『アフリカの小さな町から』筑摩書房
- 宝月誠, 2004, 『逸脱とコントロールの社会学—社会病理学を超えて』有斐閣
- 宝月誠、中野正大（共編）, 1997, 『シカゴ社会学の研究—初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣
- 宝月誠、吉原直樹（共編）, 2004, 『初期シカゴ学派の世界—思想、モノグラフ、社会的背景』恒星社厚生閣
- マークス,G.& M.フィッシャー(永淵康之訳), 1989, 『文化批判としての人類学』紀伊國屋書店
- 松田素二, 1996, 『都市を飼ひ慣らす—アフリカの都市人類学』河出書房新社
- 松田素二, 1997, 「実践的文化相対主義考—初期アフリカニストの跳躍」『民族学研究』62-2、pp 205-226
- 松田素二, 1998, 「フィールドワークをしよう・民族誌を書こう」船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房、pp152-170
- 松田素二, 2003, 「フィールドワークの窮状を超えて」『社会学評論』53-4、pp499-515
- 松田素二, 2003, 『呪医の末裔—東アフリカ・オデニョ一族の二〇世紀』講談社
- 松田素二, 2004 「変異する共同体」『文化人類学研究』69-2、pp247-270
- Matsuda,M., 1998, *URBANISATION FROM BELOW: Creativity and Soft Resistance in the Everyday life of Maragoli Migrants in Nairobi*, Kyoto University Press
- 松園万亀雄, 1991, 『グシイーケニア農民の暮らしと倫理』弘文堂
- ミード,G.H., (宝月誠、加藤一巳訳), 2004, 『G.H. ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房
- ロドネー,W., (北沢正雄訳), 1978, 『世界資本主義とアフリカ』柘植書房

(まつだ もとじ・教授)

Fieldwork and Reality : From a Socio-historiographical Research in East Africa

Motoji MATSUDA

This article aims to clarify the potentialities of understanding based on the perception of reality in fieldwork research. In recent years, the number of studies, which criticise invisible power the fieldworker has arbitrarily exercised to represent others and try to deconstruct it, has increased dramatically in sociological and anthropological research. Certainly there exists an asymmetric power relation between the represented other and representing self (fieldworker). But those discursive criticisms to make exposure of this asymmetry cannot change real world both the other and self live in. They are only transfixed in front of this situation. This article will investigate possibility of interactive communication in the everyday life world even with keeping such asymmetric power relation. The author examines the actual stage of interactive experience in his fieldwork in Kenya; living in an informal settlement, making everyday relations, participating in the community, realising the asymmetry, and recreating the higher dimension of understanding.